

# 新刊紹介

## ケンケル 化学の基礎

John Kenkel 著, 千原秀昭 訳

大学入学者の基礎学力低下が指摘される昨今、理系学部では新入生に対する化学の導入授業や入学前教育の重要性が増している。本書は、正にそのために書き下ろされた、初年度1学期用の化学序論テキストである。本書には、凝ったグラフィックもないし、大げさな表現も、学生の理解を超える記述もない。ただ、事実を明快に会話型の文で例示し、数式をほとんど使わずに、話の筋をはっきりさせるための図と、学習のための多数の演習問題が宿題として用意されているだけなのだが、「これがベストだ」という著者の意思がはっきりと伝わってくる。見方を変えると、基礎化学の必要事項をごく自然に学生へ教授するためには、何が必要で何が不必要なことであるのか、本書を一読するとよくわかる。学生のために書かれた書籍ではあるが、同時に化学の導入教育に携わる方々の指導マニュアルとしても、十分に有用な必読の一冊といえよう。

(ISBN 978-4-8079-0814-1・A5判・346ページ・2,800円+税・  
2012年刊・東京化学同人)

## はじめての計測工学 改訂第2版

南 茂夫・木村一郎・荒木 勉 著

本書は、1999年に出版された旧版の改訂第2版である。1. 計測工学と計測法の基礎、2. 物体を測る、3. 状態量を測る、4. 物質を測る、5. 信号変換と処理、6. 計測値の信頼性とデータの取り扱い、の6章から構成されている。計測全般の基礎を1章で述べた後、計測対象を「物体情報」「状態量情報」「物質情報」の三つに分け、それぞれの章で計測手法ごとに具体的な原理を簡潔に説明している。それらの情報は、センサーにより信号に変換され処理されていく。電気信号を計測の情報媒体という観点でとらえ、電機計測の入門的説明も含め5章でまとめている。最後の6章では、不確かさの概念に触れながら、測定値の信頼性とデータの扱い方をまとめている。著者が巻頭で述べているように『はじめての計測工学』であって、「やさしい計測工学」ではなく、厳格で論理的な表現箇所も随所に見られる。多岐にわたる計測法の原理を個々に述べているため、各計測法の詳細まで説明されているとは言えないが、目的の計測法の概要を把握するには適しており、詳細はそれぞれの専門書を参考にしてもらいたい。一つの計測手法を熟知した人が復習をしながら他の計測手法との技術融合を学ぶことを意図した一冊である。

(ISBN 978-4-06-156511-1・A5判・274ページ・2,600円+税・  
2012年刊・講談社)